

<ヨハネ福音書11章17～27節による説教の要約> 川村輝典

キリスト者は、常にその信仰を神から厳しく問われ、お答えして行くことを、求められている。

26節で言われる「わたし」とは、イエス・キリストご自身に他ならない。神の霊であるが、それはイエス・キリストをはっきりと私たちに示してくださる霊である。主イエスが地上を去られた後にこの世に来られる聖霊とは、決して第三のものではなく、イエス・キリストと最も密接な関係にある方である。現在、イエス・キリストが見える形で地上にいまさなくても、かつてと同様、神の啓示は変わることなく継続している。イエス・キリストを中心とした歴史が、聖書の描く歴史なのである。聖霊は、「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊」と言い表されるように、特に主イエス・キリストを私たちに示してくださる霊である。

父・子・聖霊なる神は決して三種類の神ではなく、それぞれが他の二つを代表している、まさに三にして一つなる神としか言い表すことのできない聖書の神である。

「御父と御子と共に礼拝され崇められる聖霊」という、ニカイア信条の表現は、このような関係における聖霊を言い表すのに最もふさわしいと言えよう。

主イエスが地上を去られた後に来られる方は、神ご自身であり、キリストと最も密接な関係にある方である。その意味でキリストが地上にいまさない現在も、かつてと同様、神の啓示は継続している。つまり、神は旧約時代、主イエスが地上で活躍された時代、そして天の父なる神の許に戻られた現在、のいずれの時代にも変わることなく、終末の時まで歴史と深く関わっておられるのである。聖書の神は歴史の主には他ならない。その中心にキリストが立っておられる。

主イエスは天に赴かれたが、終末の時には再び地上に戻って来られる。聖霊の働かれる時とは、この主イエスの昇天から再臨までの時であり、教会の時と呼ばれる。教会はキリストの昇天から、再臨の時まで、ひたすら主イエス・キリストを宣べ伝えつつ歩み続ける群れに他ならない。